

熱中症で中学生死亡

熱中症疑い中学生死亡

山形

部活中「暑さ指数」測らず

山形県米沢市教育委員会は30日、同市の女子中学生(13)が部活動からの帰宅中に熱中症の疑いで死亡した事案を巡り記者会見した。部活中は気温や湿度から算出する「暑さ指数」を測っていなかったと明らかにした。日本スポーツ協会の指針では、指数が高ければ「厳重警戒」「運動は原則中止」などとなっている。

市の熱中症対応ガイドラインにも「暑さ指数計による現況把握が必要」と明記してあった。市教委は、ガイドラインの周知徹底が十

分ではなかったとの認識を示した。

部活中の女子生徒は特に異常がなかったと説明。顧問が付き添い、休憩や水分補給も行っていたという。何の部活かは公表しなかった。土屋宏教育長は「命を守ることでできず申し訳ない」と陳謝した。

28日午前11時ごろ同市の歩道で女子生徒が倒れていてと119番があり、病院に運ばれたが死亡が確認された。この日の米沢市の最高気温は35・5度だった。

熱中症対策（追加資料）

暑さ指数の測定

○熱中症計を使い、活動前・活動中に測定
(別紙の暑さ指数に応じた注意事項を参照)

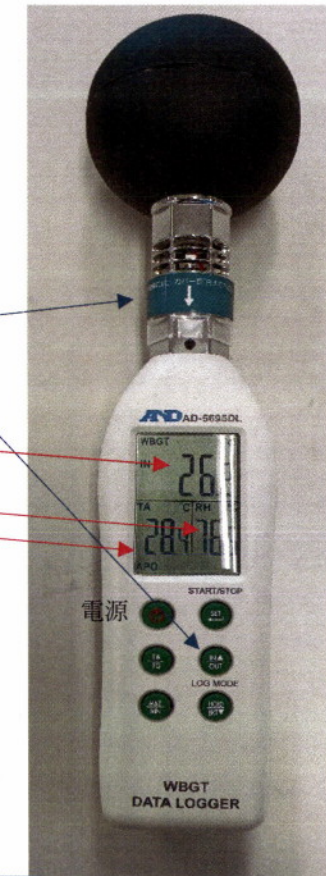
※熱中症計は、体育館と職員室に常置

<使い方>

(棚田の席の隣の机上)

- 1 電源を入れる。
- 2 室内は「IN」、屋外は「OUT」に切り替える。
- 3 測定する時は、カバーを下げる。
- 4 「TA」が気温、「RH」が湿度、「WBGT」が暑さ指数になる。
- 5 環境条件を把握した上で、休憩時間を増やしたり練習時間を短縮したりする。

※武道場及び卓球場には、温湿度計を設置する。適宜確認。



健康観察	○活動前(活動できる状態か)・活動中(健康状態や活動ペースに変化はないか)・活動後(自力で下校できる状態か)
休憩の取り方	○20分程度に1回は休憩をとる。
水分補給	○いつでも水分補給ができる環境を整える。
応急処置	<意識がある> ○涼しいところに避難し、衣服を緩め、身体を冷やす。 ○水分・塩分の補給 <反応がおかしい・意識がない> ○救急車の要請 ○涼しいところへ避難し、衣服を緩め、身体を冷やす。 ※<u>水分が摂れない、自立歩行ができない場合は、迷わず救急搬送する。</u>
その他	○夏場、暑さ指数が「厳重警戒」の日が続きます。持久走等体温が上昇しやすい運動及び教師の目が届かない場所での活動をお控えください。
熱中症警戒アラート	○暑さ指数が33を超えると予想される場合に、熱中症警戒アラートを発表する。(熱中症の危険性が極めて高くなると予測された際に、危険な暑さへの注意を呼びかけ、予防行動を促すことを目的としている)

運動に関する指針

気温 (参考)	暑さ指数 (WBGT)	熱中症予防運動指針	
35℃以上	31以上	運動は原則中止	特別の場合以外は運動を中止する。 特に子どもの場合には中止すべき。
31～35℃	28～31	厳重警戒 (激しい運動は中止)	熱中症の危険性が高いので、激しい運動や持久走など体温が 上昇しやすい運動は避ける。 10～20分おきに休憩をとり水分・塩分の補給を行う。 暑さに弱い人※は運動を軽減または中止。
28～31℃	25～28	警戒 (積極的に休憩)	熱中症の危険が増すので、積極的に休憩をとり適宜、水分・ 塩分を補給する。 激しい運動では、30分おきくらいに休憩をとる。
24～28℃	21～25	注意 (積極的に水分補給)	熱中症による死亡事故が発生する可能性がある。 熱中症の兆候に注意するとともに、運動の合間に積極的に水 分・塩分を補給する。
24℃未満	21未満	ほぼ安全 (適宜水分補給)	通常は熱中症の危険は小さいが、適宜水分・塩分の補給は必 要である。 市民マラソンなどではこの条件でも熱中症が発生するので注 意。

※暑さに弱い人：体力の低い人、肥満の人や暑さに慣れていない人など

(公財) 日本スポーツ協会「スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック」(2019) より